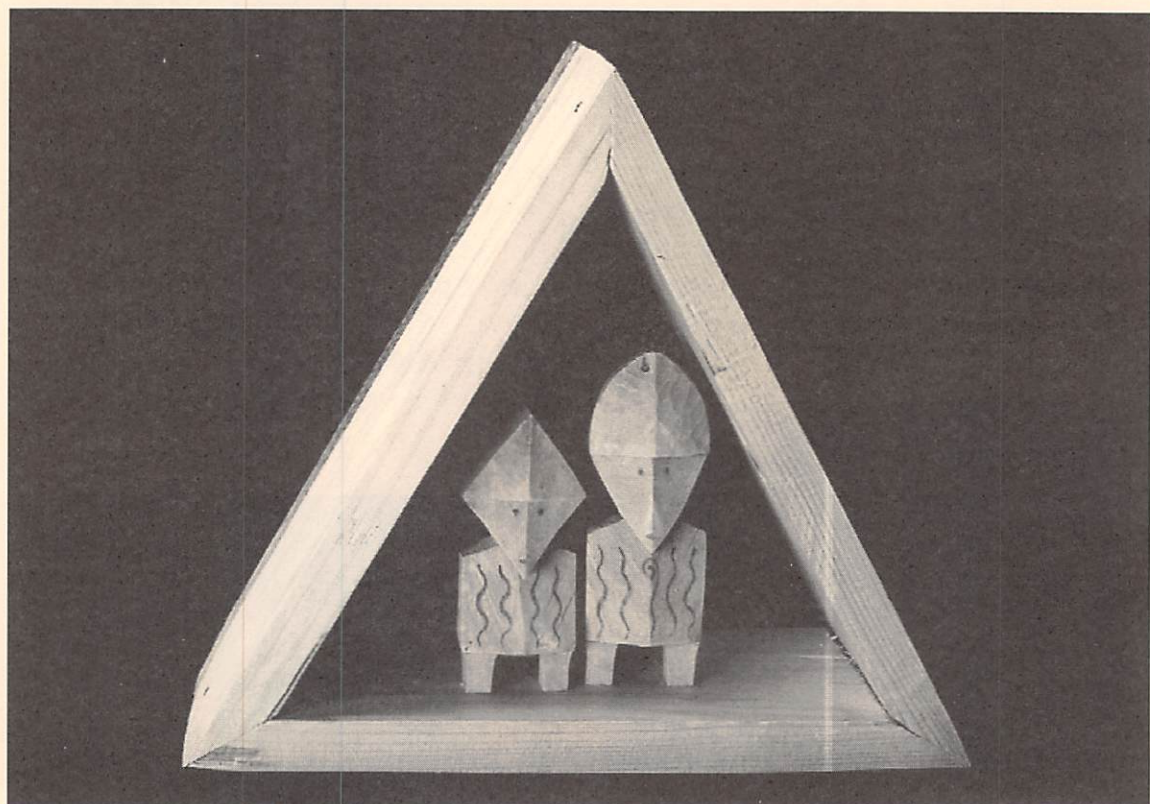


北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples



シャーマン用木・魚皮製まじない具（ナーナイ）

A.P.ドンカーン作 高さ 24.5cm 幅 28.0cm

こども用木製像（ナーナイ）

A.P.ドンカーン作 高さ 40cm

企画展 グレートジャーニー

～北をめざした人類の子孫たち～

2

開館10周年記念講演会 グレートジャーニー

～人類400万年の旅をたどる～

開館10周年記念講座 アラスカの先史文化

5

講座 北東アジアの人類史と先住民文化について

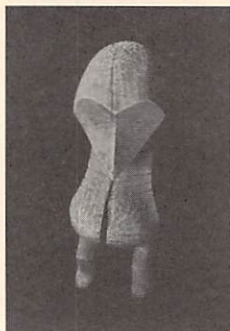
6

お知らせ・表紙・記事

7

News

8

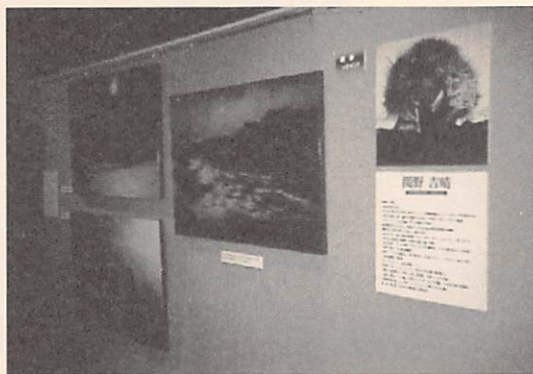


グレートジャーニー

～北をめざした人類の子孫たち～
南米、中米、北米、北東シベリアそしてモンゴル

協力／関野 吉晴氏

今年度は当館が平成3年2月10日に開館して以来10周年の節目の年にあたります。この開館10周年を記念する事業として探検家・関野吉晴氏の写真作品による企画展「グレートジャーニー～北をめざした人類の子孫たち～」を開催いたしました。これまで当館の特別展、企画展では民族資料を中心にさまざまな民族文化を紹介してきましたが、今回は関野さんの全面的なご協力によって多くの写真による企画展示を開催することができました。



展示の様子

グレートジャーニーの意味するもの

およそ400万年前に東アフリカに発祥したとされる人類は、その後、さまざまな進化の過程を経ながら移動・拡散し、ついには南米の最南端までその生活領域を広げていきました。この壮大な人類の旅を「グレートジャーニー」と名づけたのはイギリスの考古学者ブライアン・M・フェイガンです。彼ら人類の祖先たちはこの壮大な旅の過程で、それぞれの環境のもとで生きる新たな文化を創造し、伝え、固有の文化を形成してきました。

グレートジャーニーを辿ることはどんな意味をもつのでしょうか。関野さんは1971年のアマゾン踏査以来25年間に32回、通算10年間以上にわたって中央アンデス、アマゾン源流、パタゴニア、アタカマ高地、ギアナ高地などを訪ね歩き、先住民社会とともに生活されてきました。いつしか、南米の人びとはいつ、どのようにして南米に辿り着い

たのであろうかという疑問を抱くようになったと述べています。1993年12月、南米大陸の最南端パタゴニアから「グレートジャーニー」をスタートして以来、関野さんは脚力と腕力を頼りに、徒歩、カヌー・カヤック、^{もり}橇、自転車によってグレートジャーニーの道程を逆からたどる5万kmの旅を続けています。これまで続けてきた関野さんの困難に満ちた旅は、記録を目指した冒険旅行ではありません。かつて人類が辿った自然を肌で感じ、人類が出会った多様な自然とそこに生きる人びと・文化をカメラでとらえ作品を公開してきました。



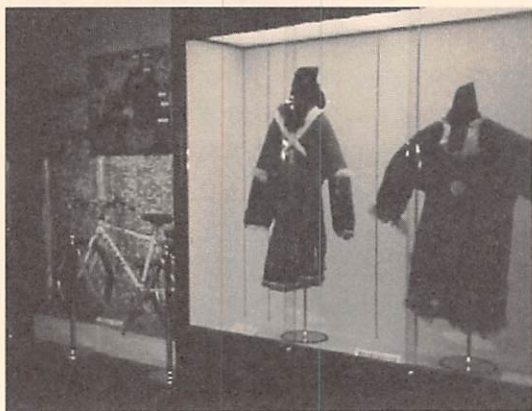
当館を観覧する関野氏

写真

関野さんの写真の魅力は日本の社会や文化あるいは現代文明という枠組みにとらわれない、人が本来もってきた人間性にもとづく人との接触における姿勢が現れていることでしょう。関野さんが人と接する姿勢は、南米踏査行のなかで、探検をつづけるために医療の必要性を痛感し医学部に入り直して医師となったことから^{うかが}窺うことができるでしょう。作品に現れている人と接する姿勢や人をみつめるまなざしとでも表現しうる資質は、南米での体験で培われてきたものには違いないでしょうが、だれもが体験から会得できるものではないと思います。おそらく、そうした感性は関野さんの本質として幼少の頃から備わっていたものでありましょう。

展示作品

本展では1993年12月に南米最南端を出発してモンゴルに到達するまでに撮影された作品を紹介しました。この間に撮影された作品は、400点を超える大型写真パネルとして各地で公開されてきました。今回の展示ではこれらすべての地域を網羅しながら、アラスカ、北東シベリア、モンゴルなど北方における自然や民族文化を中心に紹介しました。また、関野さんが使用した自転車1点、北東シベリアで着用した衣服や履物など先住民の伝統的毛皮衣類7点も展示することができました。



関野氏使用の衣類と自転車

作品群は南米先端からモンゴルに至る線上でとらえられただけではありません。人類が移動と拡散をつうじて地球上のさまざまな地域へ住みつくようになったように、関野さんはしばしばグレートジャーニーの中心ルートから逸れて各地を訪ね歩いてきました。作品はそうした広がりをもっています。実際に展示できた作品は当館の特別展示室のスペースから60点〜70点に限定され、開催期間中、3回にわたって作品の一部入れ替えを行って140点ほどを展示することができました。また、マルチスライド化した作品をビデオ映像として放映し、作品の全体像を紹介することもできました。

展示を終えて

作品に接して思うことは、それにしても人類は驚くほど適応能力をもつ生物であるということではないでしょうか。このことは、関野さんも感じられていることではないかと思います。雄大な景色は温暖な気候ばかりか、烈風、乾燥、密林、雪と氷、灼熱、極寒をとめない、そこに人びとは行き着き生活してきました。過酷な自然をものともしない人びとの笑顔は人類の可能性を象徴しています。

期間中、当企画展に対する問合せも多く、観覧者数も3000名を超え、反響の大きさを実感したところです。地球環境の多様性とそこに生きる人と文化に対する理解と関心を得られたことは、当館にとっても大きな励みとなるものです。

本企画展の開催にご尽力いただいた関野吉晴さんならびにグレートジャーニー応援団連絡事務所に感謝を申し上げます。現在、関野さんは中央アジアから東アフリカをめざして旅を続けています。無事の到達を切望するとともに、関野さんの益々のご活躍を祈念いたします。



なお、グレートジャーニーの旅の記録として以下の写真集が刊行されております。

写真集『グレートジャーニー①〜人類400万年の旅〜南米編Ⅰ』

『同②〜南米編Ⅱ』 『同③〜中米・北米編』

『同④〜アラスカ編』

『同⑤〜極東シベリア編』 『同⑥〜シベリア・モンゴル編』 (いずれも毎日新聞社)

(学芸課長 渡部 裕)

グレートジャーニー

～人類400万年の旅をたどる～

講師：関野 吉晴氏（探検家・医師）

会場 オホーツク・文化交流センター平成13年1月19日（金）19:00～20:30

人類の足跡^{たど}を辿って旅を続けている関野吉晴氏に、旅の目的や印象に残ったことについて講演いただきました。以下に要旨を紹介します。

アマゾンやアンデスの人々と同じ生活をしたいという思いから、30年前に初めて南米を旅したが、そのきっかけは、同じモンゴロイドに対する共感であり、彼らに会ってみたいと思ったからだ。実際、南米の先住民族に出会って見て、すごく似ているという印象を受けた。私たちモンゴロイドは、共通の祖先を持っているということが実感できた。

そしていつしか、「彼らモンゴロイドはどこから来たのか」と考えるようになった。現在、人類は「モンゴロイド」、「コーカソイド」、「ネグロイド」の三つに大きく分類されるが、その分類は科学的に証明されているとは言い難い。遺伝子や血液組成などを調べることによって、遺伝的距離が近いか遠いかだけを判断し、人種を分類しているのが現状である。したがって、「モンゴロイド」、「コーカソイド」、「ネグロイド」を、どこで区切るかということとは出来ない。

モンゴロイドの起源を調べるのが困難だと分かったとき、今度は人類の起源を追うようになった。「彼ら人類はどこからきたのか」・・・それを知るために、人類の歩いた道を逆回りで辿ってみようと旅に出た。それがグレートジャーニーの始まりである。人類の旅は、おそらく家族をつれて、狩猟しながら、自らの足で旅を続けたのだろうと思う。したがって本来ならば、同じ条件で旅を続けてみるのがよいのだが、この三つの条件をクリアすることは困難なので、私はせめて自分の力だけで旅をしようと思った。移動手段は、徒歩、自転車、舟、そりなど、人力によるものに限定した。

私にとって最も大切なことは、移動することそのものではない。確かにそのことだけを考えれば、難所を乗り越えるたびに達成感はあるだろう。しかし、私にとっては、各地域の自然を感じ、また自然との距離が近い人たちと共に生活しながら旅を続けることが大きな目的であった。昔の人類も様々

な人びとや自然と交流しながら旅を続けたのであろうと私は思っている。私もそんな旅をして、人類の移動の歴史を追体験してみたい、それが私の旅の本当の目的である。

スタート地点はモンゴロイドの子孫が住む最南端のアルゼンチンのナバリノ島。環境の変化が激しい南米はカヤックと徒歩で、パナマから北米までは自転車、アラスカではカヤックと犬ぞりを使い、ベーリング海峡の横断にカヤック、ユーラシア大陸に渡ってからは、徒歩、犬ぞり、カヤックを使って移動した。

南米では、アマゾン川流域に住む昔ながらの素朴な生活を営む人びとと、標高4200～4300mの山岳^い地帯に住む、高度な文明をほこったインカの末裔の人びとの生活や価値観、社会の違いが大きいことが印象に残った。北米やアラスカでは捕鯨にGPS（人工衛星を使って自分の位置を確認する装置）や携帯無線を使用したり、狩猟生活を営みながら子どもの教育に通信制を導入し、またコンピュータの使用を教えるなど、伝統文化と科学技術を調和させながら変化していく先住民の姿が印象に残った。シベリアやモンゴルでは、クジラやセイウチ狩り、遊牧の様子などに触れることができ、またどこへいっても歓待を受け、彼らの心根に触れることができた。



本講演会には、さまざまな年齢層の方々が数多く参加され、講師が用意したスライドを熱心に見入っている様子でした。関野氏の旅の記録をより詳しく知りたい方は氏の出版物をご覧ください。

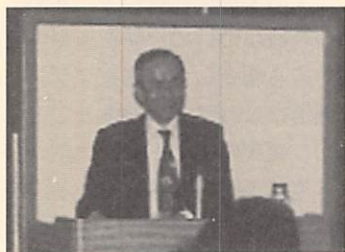
（学芸課 角 達之助）

アラスカの先史文化

講師 岡田 宏明（当館館長）

平成13年2月10日（土・開館記念日）13:30～15:00 当館講堂

開館10周年を記念に、当館館長が考古学と文化人類学の研究成果を交えながらアラスカの先史文化について講演しました。以下にその要旨を紹介します。



1960年に、明治大学が創立80周年の記念事業として行なったウィスコンシン大学との共同調査に参加したことが契機となり、1972年から1984年にかけて、総計10回にのぼる発掘調査を、いずれも文部省の科学研究費による海外調査として実施した。発掘地点はアラスカ半島の、イヌイト（エスキモー）が残したとされるホットスプリング貝塚（温泉が湧いているため「ホットスプリング」と呼ばれる）と、現在北西海岸インディアンが多く居住している東南アラスカ・ヘクタ島およびハンター・ベイの住居址と貝塚である。アラスカは北海道よりはるかに広大で人口が少なく、動植物などの自然が昔のまま残されている魅力な土地である。それと同時にアラスカにおけるイヌイトと北西海岸インディアンという、複雑な社会、文化をもつ狩猟採集民もまた魅力的な存在である。

アラスカの内陸部や海岸沿いの村を拠点にして、各々フィールド調査を行うと、一口に「イヌイト」といっても、生業形態や儀礼の面で多くの違いがみられることがわかる。内陸に住むイヌイトの生活はカリブーの肉を食べ、その毛皮をまとい、生活道具もカリブーの骨を利用するなどすべての生活の中心にカリブーが置かれており、それらを捕獲するために、彼らは移動性の高い生活を送っていた。それに対して、北極海岸沿いのイヌイトは主としてアザラシやセイウチなどの海獣狩猟を中心に生活している。またベーリング海沿いに住むイヌイトは、海獣よりもむしろサケ、マス、オヒョウ

などの魚を多く利用している。北極海岸沿いのイヌイトやベーリング海沿いのイヌイトは定着性の高い生活をしていた。

このように同じイヌイトでも住む地域の違いにより生活の仕方が違うことが分かり、当時より盛んであった生態人類学の分野では内陸型イヌイトを「単純な狩猟採集民」、海岸型イヌイトを「複雑な狩猟採集民」として捉えていた。また、北西海岸インディアンや南西アラスカのネルソン島に住んでいたアリュートも「複雑な狩猟採集民」の範疇に含まれる。彼らは数家族の人が一定の場所で、大きな住居と一緒に暮らすことが多い。

定着して生活するということは、持ち物が増え、財産ができるということにつながる。食料の面からみれば、一時期に多くの回遊魚を捕獲することができるため、それによって、捕獲した食料資源を無駄にしないためにもチームワークのある保存技術が発達する。また、複数家族が共同生活することから社会組織が変化し、宗教や儀礼の面で「単純な狩猟採集民」とは大きく異なった生活スタイルを持つようになる。つまり両者の違いは食糧資源の違いにとどまらず、それを反映する形で社会的な労働力のネットワークが変化し、ひいては社会組織そのものの変化につながっていく。

このように、生業技術にすぐれた複雑な狩猟採集民は、簡単な技術しか持たない単純な仲間たちと比べて人口密度が高く、それと併行して貴族・平民・奴隷などの社会階層性や各種の儀礼の複雑化等の特徴を出現させた。しかし、彼らがいつ頃からこのような生活をはじめたようになったのか、その変化の画期を調べるためにも考古学的に調査する必要がある。アラスカ半島と東南アラスカでの貝塚や住居址の発掘調査は、イヌイト・北西海岸インディアン文化の諸特性が、生態人類学の理論としてではなく、現実についていつ頃から、どのようにして形成されたかという問いに回答を与えてくれる。「豊かな狩猟民」に関わる生態人類学の仮説を、遺跡の発掘によって検証する楽しみ。それが我々の興味を惹き付ける最大の魅力である。

（学芸課 角 達之助）

北東アジアの人類史と先住民文化について

講師 渡部 裕（当館学芸課長）／角 達之助（当館学芸員）

平成13年2月17日（土）13:30～16:30 当館講堂

■北方の人類史

人類がサルから別れて進化していくためには、「二足歩行」、「道具の製作」「大きな脳」という3つの条件を持つことが必要であった。500万年前、チンパンジーから分化した最初の人類であるアフリカの「猿人」が「歩き出す」、つまり「二足歩行」をはじめ、次いで200万年前から20万年前の「原人」が「歩き続け」て出アフリカを果たし、その頃には「大きな脳」と「道具を持った」人類へと進化していった。その後20万年前から3万年前のネアンデルタール人に代表される「旧人」、3万年前に現れる、私たちの直接の祖先である「新人」が出現してくるが、現在では、この人類の進化の過程をみる上で2つの考え方がある。

ひとつはアフリカを後にした原人が各地域においてその環境に見合った進化を繰り返し、旧人を経て新人に進化していったとする「多地域起源説」、もうひとつは猿人から出発した人類の進化はいったん旧人の段階で途絶え、新たにアフリカで誕生した新人が世界に広がったとする「アフリカ起源説」である。

現在人類は大きく「モンゴロイド（黄色人）」、「コーカソイド（白人）」、「ネグロイド（黒人）」の3種類に区分されるが、世界の人口の約3分の2はモンゴロイドに属するといわれる。私たち日本人はモンゴロイドに属する。

日本列島にモンゴロイドが拡散していったのがいつ頃のことなのかは明らかではない。また、モンゴロイドが日本列島へ入ってきたルートについても意見の相違がある。人体の中で最も変化しにくいものとして数えられる頭蓋骨や歯を分析する方法では、縄文人は東南アジアから渡ってきたモンゴロイドであり、弥生人は寒冷地適応を果たし、さらに稲作を携えて渡ってきたモンゴロイドであるとする。考古学の成果では、縄文時代の遺跡出土の遺物はシベリアの遺物との類似が認められ、北東アジアとの関係が指摘されている。

人骨や歯といった形態を中心に系統をたどる場合と、石器などの人間が残した痕跡こゝろあとを中心に系統をたどる場合とではその結果が異なることがあり、

日本列島をふくめた北方の人類史は未解明な部分が多く残されている。

（学芸課 角 達之助）

■映像にみる北方先住民の資源利用

北東アジアの人類史に続いて、北東アジアの先住民文化の特徴について、映像資料をとおり資源利用のあり方を紹介した。北東アジアにおける資源利用は環境によって差異があることは当然だが、狩猟や漁撈、採集を中心とした自然の資源を利用するという生活手段は共通している。環境による資源利用の違いは、たとえば、比較的温暖な地域では多くの食用植物を利用することができるが、極北地域では生育する植物種は少なく、食用に利用される植物はごく限られたものとなる。また、北方地域は陸の資源は乏しく、海の資源は豊かであるという大きな特徴がある。さらに、新大陸の資源利用と比較して北東アジアを含むユーラシアにおける資源利用のあり方でもっとも特徴的な点はトナカイ飼育を行うことである。多くの場合、北東アジアの先住民はこれらの資源利用の手段を複合的に組合せることによって生活を成り立たせてきた。また、資源を交易に利用することも行ってきた。

上映した映像は次のとおりです。

① アイヌ文化伝承記録映画ビデオ大全集シリーズ6

「アイヌの四季と暮らしー捕る・採る・獲るー」

制作 財団法人アイヌ無形文化伝承保存会

監修 萱野 茂

＜内容＞クマ猟（穴熊猟、鉄砲アマッポ）の再現、山菜の採集と調理、サケ漁に使われる鉤鉈かぎもり（マレク）の製作とサケ漁を収録。

② 「チュコトカー記憶の岸辺ー」 1987年

制作 ラトビア共和国リガ撮影所

監督 アンドリス・スラーピンシュ

＜内容＞北東シベリアの最東端、チュコト半島のシベリア・イヌイト、チュクチの人々の生活を紹介。

③ 最近のカムチャツカ半島における映像

撮影 当館

撮影地 カムチャツカ州アナブガイ村、チギリ村など

＜内容＞サケ漁やトナカイ飼育

（学芸課長 渡部 裕）

平成12年度の収集資料について

平成12年度は 実物資料72件、映像資料15件を収集しました。また数多くの寄贈資料を受贈しています。

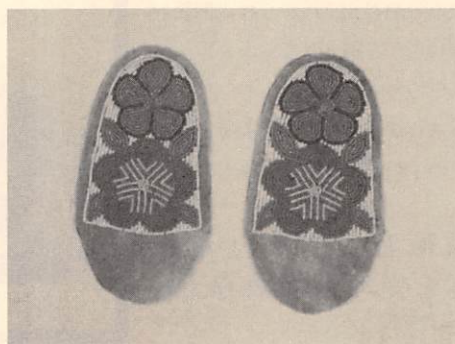
実物資料の民族別の内訳は以下のとおりです。

ナーナイ	シャマン用まじない具等	23件
アイヌ	木彫ほか	3件 (トンコリ20点含む)
ウイльта	衣服、切り絵等	13件
コリヤーク	トナカイ引き綱	1件
エベン	ユキヒツジ角製まな板等	2件
イテリメン	木製人形	1件
アサバスカインディアン	ビーズ刺繍 ^{ししゅう} 他	29件

ナーナイの資料(表紙参照)は、ナーナイの彫刻家アナートル・ドンカーン氏が復元を試みたもので、シャマンのまじない具が中心です。昨年収集したシャマンの衣服一式に加え、精神世界に関する資料を充実させることができました。

またサハリンアイヌの楽器であり、最近では国内でも演奏が聴かれるようになってきたトンコリ(五弦琴)を20点収集しました。これは博物館利用者の体験用として収集したもので、6月にトンコリ演奏の講習会を予定しています。

アサバスカインディアンの資料では、ビーズ刺繍がほどこされた資料のほか、ヘラジカやビーバーの毛皮、ヤマアラシの刺といったさまざまな素材を収集しました。写真の資料はなめしたヘラジカ



の皮に花文様のビーズがほどこされており、皮製の靴「モカシン」の甲の部分の飾りとなります。これら資料は今年7月から開催する『美しき北の文様』で展示をする予定です。

映像資料は、第15回特別展「トータルポールとサケの人びと」にあわせて収集した北米北西海岸インディアンの資料が9巻、「アイヌ文化伝承記録映画」第6集(5巻)に加え、昭和13(1938)年に日本領時代の樺太のオタスの杜^{もり}で宮本馨太郎氏が撮影した「オロッコ・ギリヤークの生活」(17分30秒)を収集することができました。この映像については民族学の学術誌*にも報告されており、情報のある貴重な資料で、当時のウイльтаやニプフの人びとの生活が記録された数少ない映像のひとつです。(学芸課 笹倉 いる美)

*宮本馨太郎 1958「オロッコ・ギリヤークの衣食住」『民族学研究』22(1-2):5-14

みんぞく こうこ はくぶつかん in 北海道

このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 1/5 (金) 国立科学博物館の歯の形状比較分析によって、縄文時代(紀元前1~紀元6世紀)の北海道に渡来系弥生人や北方系渡来人が来ていたことが明らかに/D
- 1/9 (火) アイヌ民族の若者が伝統的な舟「イタオマチブ」を使って北米・アラスカへ航海することを構想、札幌市/D
- 1/25 (木) 留萌管内天塩町で世界最古(370万年前から250万年前)のククジラの化石発見/D

- 1/25 (木) 釧路アイヌ民芸企業組合がアイヌ民族の琴「トンコリ」を改良、発売したところ、大量の注文が舞い込み大人気/D (夕)
- 1/28 (日) 半世紀におよぶ「札幌雪祭り」の歴史を伝える「札幌雪祭り資料館」が開館、札幌市/D
- 2/3 (土) 海外収蔵のアイヌ民族資料が19カ国91施設に13,378点あることが判明/D
- 2/25 (日) 札幌市の市立北辰中学校の生徒たちが校庭にイグルー(雪の家)を作り雪中キャンプを行う、札幌市/AS
- 2/27 (火) 二風谷アイヌ資料館長の萱野茂氏が博士号を取得。学位論文は「アイヌ民族における神送りの研究—沙流川流域を中心に—」/AS
- 3/1 (木) 関東ウタリ協会が樺太アイヌの弦楽器「トンコリ」を復元し、演奏曲をCDに収録、東京/AS

※A: 網走新聞、AS: 朝日新聞、D: 北海道新聞
複数紙掲載の場合は抜粋が大きい方を紹介しています。

■寄贈資料

- ・札幌市の納谷大宝氏から樺太関係の写真40点が寄贈されました。
- ・札幌市の谷本一之氏からハンティのクマ送り儀礼具、音楽評論家田辺尚雄氏の手帳等が寄贈されました。

■執筆者・出版社から贈呈を受けた書籍等
(1~3月)

- ・アレクサンドル・カンチュガ 著
津曲敏郎 訳 2001『ビギン川のほとり
で一沿海州ウデへの少年時代』
北海道大学図書刊行会
- ・黒田信一郎 2001『ギリヤーク族の
社会構造』発行 黒田矢須子

■主な来館者

- 2/11 (日)
フィンランド大使館
報道・文化担当一等書記官
サミ・ヒルヴォ氏
- 2/18 (日)
サハリン州郷土博物館
副館長 タチアナ・ローン氏
- 2/21 (水)
東京大学総合研究博物館
助教授 西秋 良宏氏
遠軽考古学同好会
会長 本吉 春雄氏
- 2/23 (金)
国立民族学博物館
助教授 岸上 伸啓氏
情報管理施設 宇治谷 恵氏
情報企画課 宇江 茂氏

前館長 大林 太良 氏 逝去



当館初代館長の大林太良先生が4月12日
にご逝去されました。

大林先生は東京大学教授を退官され、初
代館長として当館の開館前後6年にわたり
鋭意指導し、当館の基礎を築かれました。

突然の訃報に接し痛惜の念耐えがたく、
今はただご冥福を祈るのみです。

■行事案内 (4~6月)

- 5/5 (土・祝) こども映写室
5/18 (金)、19 (土)、20 (日)
講習会「とんぼ玉づくり」
6/2 (土)
講習会「アイヌの楽器・
トンコリ講習会」

- 6/23 (土)
博物館クラブ「石器づくり」

■その他の行事報告
(1~3月)

- 3/10 (土) 博物館クラブ
「かんじきで歩こう」

■観覧者動向 (1~3月)

	常設展示	企画展
1月	534	535
2月	2,027	1,253
3月	1,407	1,234
計	3,968名	3,022名

平成12年度観覧者数総計

33,223名

■職員の異動

- 退職 (3月31日付)
管理課主査 佐久間俊雄
解説員 本川 千夏
転出 (4月1日付)
管理課主事 山藤 武徳
(空知教育局企画総務課教職員給与
係へ)
転入 (4月1日付)
管理課主任 工藤公美子
(網走教育局生涯学習課学校教育係
より)
採用 (4月1日付)
管理課主査 池田 均
(網走地区消防組合消防本部消防長
より)

■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会会員を募集中
です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」
や「友の会だより」をとおして北の文
化を紹介しています。年会費は3000円
です。すでに会員になられた方は、お
知り合いの方にもご紹介下さい。詳し
くはお問い合わせを。